

論 文

『潤一郎訳 源氏物語』(旧訳)の特質

— 岡崎義恵「谷崎源氏論」からの一考察 —

大 津 直 子

同志社女子大学・表象文化学部・日本語日本文学科・准教授

The Characteristics of Junichiro's Translation of "The Tale of Genji"

— Focusing on Yoshie Okazaki's "Tanizaki Genji Theory" —

OTSU Naoko

Department of Japanese Language and Literature, Faculty of Culture and Representation,
Doshisha Women's College of Liberal Arts, Associate professor

はじめに

国家総動員法が發布された次年にあたる昭和十四年(一九三九)一月、『潤一郎訳 源氏物語』、通称(旧訳)の刊行が始まる。こうした時局に先んじて、出版元中央公論社は「国体明徴的においをもった」校閲者を求め、山田孝雄に白羽の矢を立てた。国粹主義を牽引する山田の参画を冷ややかに見ていた国文学者も多かった。池田彌三郎「私製・折口信夫年譜」には、昭和二年(一九四七)九月、折口の次のような発言が記されている。^②

——中央公論が持つて行ったのだから、山田孝雄さんとしては、『源氏』は蹴らなくてはね。谷崎源氏の校閲を引き受けたことで、あの人も信用できないと思った。生活が大きくなってくると、あの人などは間違うのだからね。

戦後の改訳から谷崎源氏に助力した玉上琢彌も、「当時は山田孝雄博士校閲と言うのは場違いの感じがし」た、それゆえ出版のための「カムフラージュ」だと思っていたという。^③加えて、訳文からは光源氏と藤壺との密通をはじめとした不敬箇所も取り除かれた。^④(旧訳)は周到な配慮を以て刊行されたのである。こうした処置には、時局柄理解が寄せられた。「空蟬」までを読んだ舟橋聖一は、「非常に神経質になつて考へれば、可成り、あつちこつちに削除した方がいゝのではないか、伏字にした方がいゝのではないかと思はれるやうな個処も残つてゐないではない」とし、「殆ど完全に、原文を移しかへてゐるといつても大過ない程に無疵」と好意的に評価している。^⑤

そのような状況を打ち破り、(旧訳)を舌鋒鋭く批判したのが、東北帝国大学教授であった岡崎義恵である。「花散里」までを読了した岡崎の「谷崎源氏論」は、昭和十四年(一九三九)五月、四日に亘り「東京朝日新聞」に掲載された。とりわけ痛烈であったのは削除について言及した最終回である。岡崎は、卑猥な箇所を伏字にして出版された西鶴文学を引き合いに出して、「紅葉賀や賢木などの深刻な描写」があなたももとよりなかった(かのように)処理されていることを問題視し、次のように批判したのである。

今度の切捨ては全体の五分にも達しないもので、筋の根幹を成す部分ではないと訳者は言はれるが私の解釈では必ずしもさうは言へないと思ふ。その部分分量は少くとも、まづ物語の脊髄とも言ふべき所でその芸術的意義から言へば、これが有ると無いとでは、源氏物語が骨無し源氏になるかどうかといふ程重要な部分であると思はれる。

「今度の切捨て」とは具体的には密通の場面を指す。岡崎は光源氏の恋愛遍歴の

根底に在る存在、藤壺が『源氏物語』の脊髄であり、それを削った（旧訳）は「骨無し源氏」であると断じたのであった。切っ先のような言葉は忘れたいものであったようで、谷崎は後年の随筆「雪後庵夜話」においてもこの件に言及している。「削除した部分よりも削除しない部分の方が遙かに分量が多い」のだから「源氏を理解する上の助け」にはなり得たと反駁した上で、当時岡崎の批判は自分に対してのみならず山田にも向けられており、二人で「黙殺」の態度をとったと振り返ったのだ。ただし谷崎は、戦後昭和二年（一九五二）二月稿の〈新訳〉序文では「何分にも頑迷固陋な軍国思想の跋扈してゐた時代」ゆえ（旧訳）では「分らずやの軍人共の忌避に触れないやうにするため、最少限度に於いて原作の筋を歪め、削り、ずらし、ぼかしなどせざるを得なかつた」と認めてもいる。以上のような経緯から、時局に迎合した訳文という（旧訳）への評価は、現在も根強く残っている。

ただし、「谷崎源氏論」そのものに立ち返ってみると、谷崎源氏の研究史上、岡崎の主張の全貌についてはほぼ見過ごされてきた。実のところ岡崎は、谷崎がこだわった（旧訳）の特質を鋭く批判している。後述するが、そのことは〈新訳〉の方針変更にも極めて大きな影響を与えた。とりわけ谷崎が「流麗」と呼ぶ（旧訳）の文体（以下、〈流麗体〉とも）を捨てたという事実は、谷崎源氏研究の要諦であると考えられる。そこで本稿では、岡崎の「谷崎源氏論」を通して、（旧訳）の特質、特に〈流麗体〉という文体の本性を炙り出してみたい。

一、岡崎義恵「谷崎源氏論」とその影響

谷崎は、〈新訳〉序文で（旧訳）の出来を「今読み返して見ても、あの出来栄えをさう不満足には感じない」と記し、次のように振り返っている。

たゞあの訳文は、原文に於けるよりも一つ／＼の文章の構造が複雑になつてをり、原文では簡結な単文を以て綴られてゐるのに、訳文ではそれらのいくつかを接続詞を以て結合させた、長い形の複文になつてゐる箇所が多い。当時此のことを指摘して批難する人もあつたけれども、そのことは夙に私自身が心づいてゐたのであつて、私の欲したのは、徒な批難でなしに、もしもあゝ云ふ文体に勝る文体が他にあり得るなら、実例を以て示してくれることであつた。而も私は、苟くも原文の色、匂、品位、含蓄等を伝へようとする文学的翻訳であるからには、私の選んだあの文体に勝る文体はあり得ないものと、心中自負してゐたのであつた。尤もあの文体では、原文の持つ流麗さは伝へられるにしても、簡結さを伝えることは不可能であつたが、それはいかんとも仕方がなかつた。

もと／＼翻訳と云ふ制肘を受けてゐるからには、原文の具備する総べての長所を悉く移植しようとしても無理であることは分つてゐたので、私は原文の一方の長所である簡結を捨て、流麗の一面を生かすことに努めたのであつて、此の点はどうにも不満足であつたけれども、已むを得ないことだと思つてゐた。

傍線を付した箇所には、「流麗」さを活かすために原文が単文となつてゐる箇所をあえて結合し複文を作り上げたこと、そのために原文の「簡結」さを放棄したことが記されている。原文の通りに句点を打つ「簡結」が「流麗」と対立する概念として位置付けられていることに注意したい^⑦。その上で、谷崎は改めて〈流麗体〉こそが「原文の色、匂、品位、含蓄等を伝へようとする文学的翻訳」を支えるに相応しい「文体」であつたと主張している。破線部「当時此のことを指摘して批難する人」とはまさに岡崎その人を指していると思しい。

さて、「谷崎源氏論」の全体の構成は以下の通りである。

- (一) 第二回配本まで通読して（以下、「第一回」）
- (二) 損はれた原文の陰翳・含蓄（以下、「第二回」）
- (三) 通俗的に調子づいた散文（以下、「第三回」）
- (四) 蹂躪された芸術的境地（以下、「第四回」）

意外にも第一回では、（旧訳）が「純粹な現代語に近く、単に通俗化といふのみでなく、相当文藝的価値を活かさうとしたもの」と評され、「大衆の安んじて読み得る、原作を忠実に伝へた、文学的価値の高い翻訳」と位置づけられている。自分は賛辞の寄せられている（旧訳）の問題点を指摘する「損な役目」を務めることにしたと結ばれていることから、初回はほぼ当時の世評を踏襲した批評と見てよいであろう。文体に言及があるのは第二回である。

まづ谷崎氏は「原文の持つ含蓄と云ふか、余情と云ふか、十のものを七分ぐらゐにしか云はない表現法」を、なるべく踏襲するやうにした」と言ひ、「努めて饒舌にならないやうに、言葉の分量と種類とを節して、原文のあの曖昧さ、幾様にも取れるやうな云ひ方から生ずる陰影を、わざといくらか残すやうにした」と言はれるが、実際は相当饒舌といふ感を与える。

それは言葉数が多いといふこともある。与謝野晶子氏や窪田空穂氏の訳に比べると、強ひて言葉を軟かにしようとして、却つてくどくどしくなつてゐる。それに谷崎氏は「文章読本」の中でも言つて居られるやうに、此物語の文章は切れたやうな所でも実は続いてゐるといふ原則を立て、出来るだけ文章をずらすと曳摺つて行かうとする。その為、陰影や含蓄は却つて失はれ、寧ろくどいお話を聞く思ひがする。

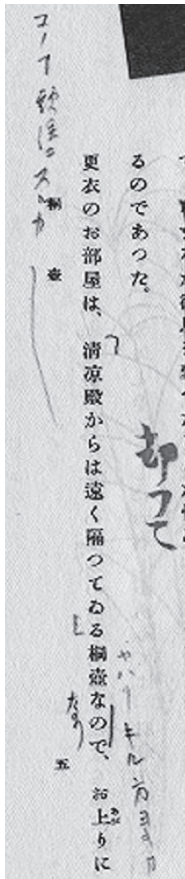
「十のものを七分ぐらゐにしか云はない表現法」、これは昭和九年（一九三四）に発表した『文章読本』をはじめとして、谷崎が日本語の特性として繰り返し説くところである。谷崎によると、日本の文章は西洋の文章とは異なり理詰めの叙述には向いておらず、豊富な敬語や語尾表現を用いて物事を暗示的に描き出すことに長けているという。谷崎はそうした特質を「含蓄」と呼び「此の読本は始めから終りまで、殆ど含蓄の一事を説いてゐるのだと申してもよい」とまで述べている。ところが岡崎は（旧訳）の訳文を右のように真つ向から否定する。「陰影や含蓄」が「文学的翻訳」の核心に置かれてることを思えば、なかなか手厳しい。岡崎は気に入らない部分として、具体的に三箇所を例示している。一つ目は「桐壺」巻、更衣の居所が物語上で初めて明かされる「御局は桐壺なり。」という一文である。

原作の文章は単に連続させてあるといふのではなく、センテンスからセンテンスへの受渡しに呼吸がこもつて居り、極めて長いセンテンスがあるかと思ふと、又極めて短いセンテンスが、其中に点出されてゐて、鋭く気持を引緊めてゆく所もあるのである。例へば桐壺更衣の宮中における位置を「御局は桐壺なり。」の語で簡潔に、さうして深い含蓄を持たせて指示してゐるなどは、誰でも感心する所であらう。それが「更衣のお部屋は、清涼殿からは遠く隔つてゐる桐壺なので、……」となつては、響きも何もない註釈家の駄文と選ぶ所がない。

（第二回）

岡崎の言う通り、この短文には、帝のいる清涼殿から最も遠い御殿をあてがわれていること、行き来の度に数多の妃たちの嫉妬のまなざしを浴びるに違いないことが暗示されている。確かに「簡潔」な原文に「含蓄」が宿る一文と言える。興味深いのは、改訳の折、谷崎に向けて山田が次のような書き入れをしていることである。

〔画像①〕



（一度目の校閲・山田書入旧訳本）

「桐壺なので」という本文の傍らに「ヤハリキル方ヨキカ」とある。別稿で論じた箇所ゆえ詳細はそちらに譲るが、「やはり」という言葉から、谷崎との間でかね

てより文の切断が議論の遡上に上がっていったと知られる。（新訳）の本文が「更衣のお局は桐壺なのです。」と変更されているのは、岡崎の指摘を踏まえたからなのであった。

二つ目は「葵」巻、葵の上が亡くなり光源氏が左大臣邸を去った後の描写である。岡崎は次のように指摘する。

そこは「……いと悲しくて、さとうち泣きたる、そぞろ寒き夕の気色なり。」となつてゐる。谷崎氏はそれを「……急に悲しくなつて、一度に泣き出したりにして、そぞろに肌寒い夕暮のけしきなのであるが、……」と次へ続けてゐる。これでは私などそぞろ寒寂寥が身に染みて来るやうに思へないのである。

（第二回）

谷崎が訳出に用いた『湖月抄』原文と、（旧訳）、改訳の試作版に当たるタイプ原稿、そして完成した（新訳）と、訳文の変遷を示すと次のようになる。

〈原文〉

と、御心忍もえしのびあへたまはずなき給に、おまへなるおとなくしき人など、いとかなしくて、さとうちなきたる、そぞろさむき夕のけしきなり、わかき人々は、所々にむれあつ、をのがどちあはれなることどもうちかたらひて、

〈旧訳〉

「と、おん声も忍びあへず泣き給ふのに、お前に候ふ年嵩な女房なども、急に悲しくなつて、一度に泣き出したりして、そぞろに肌寒い夕暮のけしきなのであるが、若い人々はところ々にかたまりながら、

〈タイプ原稿〉

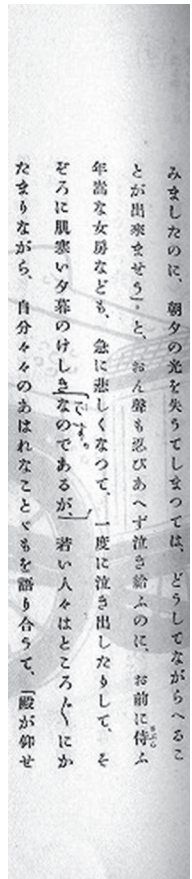
「と、おん声も忍びあへず泣き給ふのに、お前に候ふ年嵩な女房なども、とても悲しくなりました、一度に泣き出したりしまして、そぞろ寒い夕暮のけしきなのです。若い人々はところ々にかたまりながら、

〈新訳〉

「と、おん声も忍びあへず泣き給ふのに、お前に候ふ年嵩な女房なども、とても悲しくなりました、一度に泣き出したりしまして、そぞろ寒い夕暮のけしきなのです。若い人々はところ々にかたまりながら、

句点を極力用いず、一文の区切りを不明瞭にしたまま読点でつないでゆく訳文、これが典型的な（流麗体）である。後にまたふれるが、谷崎はこの方法を『湖月抄』から着想したらしい。ところが、改訳の折、タイプ原稿の段階で既に文章は切断され、（流麗体）は消えている。

〔画像②〕



(一度目の進言・玉上書入旧訳本)

この箇所は「画像②」の通り、玉上の進言によって改訳がなされた。

三つ目は「帚木」巻冒頭である。岡崎は「光源氏、名のみことくしう、言ひ消たれ給ふ咎多かくなるに」という原文について「続いてあるやうで実は歯切れのよい、鋭く射込んで来るやうな言葉」と評したうえで、(旧訳)を次のように評した。それが「光源氏の、お名前だけは仰々しう持て囃されて、何の彼のと貶され給ふ欠点が多くおありになるのに、……」では、調子はなだらかであるが、優等生の答案のやうに、唯おだやかに出来てゐるといふだけの文章である。尤もこれはとても原文の軟かなやうで鋭い口調が、今日の口語では出せないと言へばそれまでの事であるが、其処は寧ろ思ひ切つた意識の態度でも取つて、註釈的語調を捨ててかかれば出来ない事もないと思ふ。(第二回)

訳文の長さに関する指摘ではないが、こちらも改訳の変遷を見てみよう。

〔原文〕

ひかる源氏、なのみことくしう、いひけたれ給ふ、とがおほかなるに、

〔旧訳〕

光源氏の、お名前だけは仰々しう持て囃されて、何の彼のと貶され給ふ欠点が多くおありになるのに、

〔タイプ原稿〕

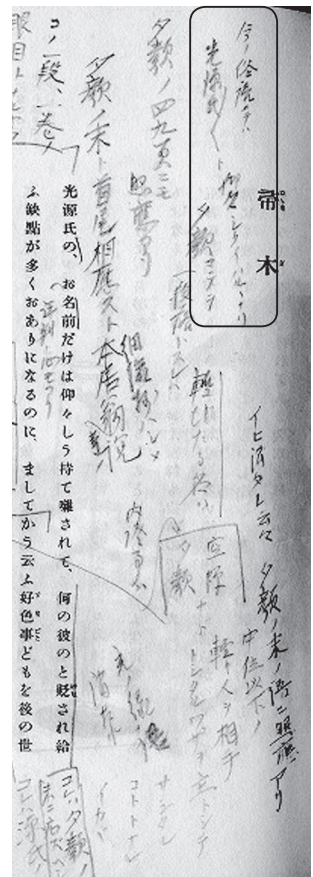
光源氏、光源氏と、評判だけは仰々しうて、一面には非難をお受けになるやうな失錯も多い事ですのに、

〔新訳〕

光源氏、光源氏と、評判だけは仰々しうて、一面には非難をお受けになるやうな失錯も多い事ですのに、

「優等生の答案」のように面白みがない、と酷評された(旧訳)から、(新訳)は「光源氏、光源氏と、評判だけは仰々しうて」と大きく変更されている。実はここにも早々に山田の指摘が入った(枠線は稿者による)。

〔画像③〕



(一度目の校閲・山田書入旧訳本)

改訳のプロセスで校閲は二度行われるが、一度目からこれほど書き入れがあることは珍しい。注目したいのは、今ノ俗語ニテハ光源氏くト仰々シクイハル、ナリ」という箇所である。「今ノ俗語」に当てはめる考えは、前掲岡崎の「今日の口語では出せないと云へばそれまでの事であるが」以下の言葉を受けてのものであろう。なお、この改訳の顛末は当時の担当編集者滝沢博士の回顧録にも記されている。

山田先生はタイプ原稿の上欄に朱筆で、「ここは、光源氏よ、光源氏よ……といふやうな意である」と注を書き込まれた。谷崎先生はこのご指摘をうけて、次のように直された。

光源氏、光源氏と、評判だけは仰々しうて……

あとになって、「君、あそこは玉上さん(玉上琢弥氏、源氏学者)に褒められたよ」と谷崎先生がうれしそうに仰っしゃったのをわたしは記憶している。

山田の(新訳)の校閲は、削除箇所の指摘や語釈を主としており、試訳を示すのは珍しい。それゆえ、滝沢の記憶に残ったのである¹⁶⁾。

以上見てきたとおり、岡崎が言及した箇所には改訳の折いずれも直ちに修正が入っている。第二回末尾は「谷崎氏のだからだらした文章は、電燈の光を薄くして唯一面にぼやぼやさせてしまった人工的照明である。微妙な光と影との交錯がない。王朝女性のいきいきした息づかひを感じせしめず、唯老翁のどんよりとした練り言を聞く思ひがする」と閉められる。痛烈な言葉が谷崎のみならず山田にとっても看過ならざるものであったことを指摘しておきたい。

第三回で岡崎が焦点をあてたのは、(旧訳)に過剰に付された敬語である。

訳文では「いらつしやる」「遊ばす」「給ふ」などを混用してあるが、今日では「給ふ」といふのは、同輩以下に対しては「何々したまへ」などと使ふけれど

も、目上の人には言はないもので、それを「いらつしやる」と同様には用ゐられない筈である。だからこれを混用するのは決して現代の口語ではなく、何時代ともわからない谷崎源氏の世界の言葉である。これは自然に紫式部の口から流れ出た敬語とはまるで違つた、昭和の文士の人工的な文章に外ならない。

(第三回)

昭和三年(一九二八)ごろ、谷崎は主格を表記せずとも示すことが出来る敬語の機能に注目していた。(旧訳)は敬語を挿入しながら文を接続することで明記せずして主語を示す、理想的な「現代口語文」の実践でもあった。¹⁸⁾したがって右もまた「文学的翻訳」という理念を真つ向から否定する言葉である。

昭和二年(一九五一)一月二六日、谷崎は玉上と対面し、(新訳)への助力を依頼する。玉上は谷崎の依頼内容を次のように記している。

『旧訳』で削除したところをおこすこと。この機会に訳文に手を加える。『新訳』の序に、「原文の一方の長所である簡結を捨てて流麗の一面を生かすことに努めた」旧訳の訳しぶりを改める。原文の一文を一文に、○で切れる所は訳文でも○にする、と言われた。また『旧訳』は敬語が丁寧すぎる。じじつ「あそぼせ」言葉を使う人でも何から何まで「あそぼす」でゆけるものではない、と言われた。

重要なのは、改訳に着手するごく初期の段階で既に文章の結節点に付した敬語の削除が決定していたことである。これは「簡結を捨てて流麗の一面を生かした」文を棄てることと同意であり、「文学的翻訳」が撤回されることを意味する。岡崎の(流麗体)批判は、時局のせいにはできないという点において「骨無し源氏」という言葉以上に深刻に受け止められたらしい。谷崎、山田は岡崎の「谷崎源氏論」を「黙殺」したとする証言もある。¹⁹⁾しかしながら改訳の経緯を見る限り、その余波は実のところ極めて大きかったと言えよう。

二、岡崎の批評、その後

「谷崎源氏論」は昭和一五年(一九四〇)に加筆され「古典の現代化と大衆化」(以下、「一五年稿」として『美の伝統』(弘文堂書房)に、さらに昭和三四年(一九五九)八月に追記部分を加えて「谷崎源氏論―古典の現代化と大衆化」(以下、「三四年稿」として著作集に再録される。一五年稿には多くの(旧訳)擁護、谷崎擁護の意見が寄せられたという新聞掲載後の反響が記されている。中には「感情的な、筋路の通らない罵詈雑言や捨て詞」も少なくなかったよう、岡崎は時評、書評を書く

こと自体にすっかり懲りてしまったらしい。一五年稿では改めて、「谷崎源氏論」が信念をもって臨んだ仕事であったことが強調されている。

さて、ここで注目したいのが一五年稿で加筆された部分である。冒頭では、古典が「高級な文化的遺産」であるがゆえに、「必ずしも通俗的・大衆的ではなく、寧ろ選ばれた少数の教養人によつて了解され維持される筈のもの」であること、その命脈を保つためには「選ばれた教養人によつて常に披かれ、十分に解明され、社会を導く力として大衆の中に移植され」る必要があることが説かれている。現代語訳について書かれた部分を見てみたい。

古典を口語に直したり、古画を複製したりする場合、それは大衆の手にとり易くはなるが、多くの場合、同時に原古典の高度の価値が失はれ、甘くなつたり、だらしなくなつたり、つまり下手くそな模写のやうなものになつてゐるのである。それは古典を大衆化する人の素養よりも、寧ろ大衆の受用といふ目的の方から影響されるであらう。併し私はひそかに思ふのであるが、かやうな大衆化を思ひ立つ人、それを依頼される人などは、何程か大衆向の低俗性を持つてゐるから、さういふ事業に関与するやうになるのではなからうか。さうしてみると、古典を大衆化するといふ人が、既にその素質に古典を崩さうとする傾向を含んでゐるやうにも思はれるのである。

右で強調されているのは、古典が「大衆化」されることへの強い危機感である。「大衆」になじみややすい現代語訳は往々にして「下手くそな模写のやうなもの」になりがちで、原典の高度な価値を毀損することがある。一般論としての批判のやうでありながら、傍線部「大衆化を思ひ立つ人」「それを依頼される人」とは暗に中央公論社、谷崎を指している。一見すると、かやうな表現は学者の権威主義的、エリートの排外主義的な言説にも読めてしまう。この点を正確に理解するには当時の学界の状況を踏まえる必要がある。

近代は、古典文学を学問の対象として確立するための方法が模索された時期であった。昭和一〇年(一九三五)前後、文献学を中心としながらも雑学的要素を多分に持っていた国文学の領域に自己検討の波が起る。²⁰⁾「谷崎源氏論」に遡ること五年、昭和九年(一九三四)に岡崎は「日本文芸学」を樹立している。美学・芸術学を基礎とした体系を完成させた岡崎の日本文芸論は新鮮味をもって受け止められ、いま一つの際立った傾向であった近藤忠義らの「歴史社会学派」との間で日本文学史上に残る議論を巻き起こしたのである。²¹⁾ところが、古典を「日本的なるもの」「日本主義」の聖典として称揚する国粹主義が高まると、「歴史社会学派」はこれに抵抗両者の対立は激化してゆく。²²⁾岡崎は昭和一三年(一九三八)十月に「古典研究の現

代的意義」(『文学』一六一号、のちに『美の伝統』に再録)を発表している。

かういふ意見を述べると、或は意外の感を起す人もあるかも知れないが、私は流俗の説の如く、古典を大衆化せよとか、古典の研究を盛にして社会に働きかけよなどといふ事を、むやみに大きな声で叫ぶ気持ちになれないのである。かやうな時代に軽々しく古典を市にさらす事は、悪くすると古典に内蔵される高き生命力を引下げ踏みじめる事にもなるであらう。古典の価値を明かにして見せると、何でも一応は見たやうな風をして、すぐ他所を向いてしまふ者も尠くはない。古典研究とは空疎な古典礼讃か、さうでなければ古典冒瀆に外ならないのが、今日の時勢であるやうにも思はれる。

岡崎は、古典研究が混迷する社会に持ち込まれること自体を憂い、安易に社会に向けて『源氏物語』を拓くことに危惧を抱いていた。後続の箇所には、「今日」の日本に自国の古典のみが世界的古典となり得るといふ思い上がりがあること、世界の文化を尊重しない態度がむしろ古典の真意に反するものであることも記されている。文化論に立脚して反戦の意思を表明していることは、時局の動乱とは距離を取る超然とした態度であったと言えよう。こうした状況で筆を執ったのが、次年に発表された「谷崎源氏論」である。再び「一五年稿」に目を戻すと、引用外の箇所には「古典を市にさらす」(旧訳)の「誇大な広告と、広告に駆り出された礼讃の辞」に「少からざる反感」を抱いたことも記されている。まして、物語の一部を削除してまで刊行にこぎつけたという事実は、時局のはざままで古典が八つ裂きにされてしまったという耐えがたい苦痛を岡崎に与えたことだろう。「骨無し源氏」とは、こうした背景を持つ言葉なのである。

実は岡崎と山田とは、山田が昭和八年(一九三三)に退官するまで東北帝国大学の同僚であった。明治二五年(一八九二)生まれの岡崎と、明治六年(一八七三)生まれの山田とは二十歳近くの年齢差があるが、大正一二年(一九二三)岡崎が助教として、大正一四年(一九二五)山田が講師として着任して以降、研究会を通じても交流があった。退官後山田は政府の要職に就き国体明徴運動を牽引してゆくことになるのだが、昭和一一年(一九三六)発足した官製学会、日本諸学振興委員会の委員名簿には両者の名が確認できる。山田は昭和二〇年(一九四五)六月開催の最後の学会まで国粹主義の総帥として君臨したが、岡崎がいかように関わったかについては管見では確認できていない。両者が邂逅する折はあったのだろうか。ただし、「谷崎源氏論」はこうした事情に一切拘泥することなく(旧訳)の特徴のみに言及した。それゆえに谷崎も山田もこれを等閑に付すことはできなかったのである。

三、〈流麗体〉の真骨頂

それでは〈流麗体〉は単に「だらだらした文章」に過ぎぬ失敗であったのか。岡崎の言う『源氏物語』の文章の「簡結」さは、例えば次のような箇所に見れている。藤つぼは、おほけなきころなからましかば、ましてめてたくみえましとおぼすに、夢のこゝちなんし給ひける、宮はやがて御とのあ成けり、けふのしがくは青海波にことみなつきぬ、いかゞ見たまひつるときこえ給へば、あいなう御いらへきこえにくくて、ことに侍つとばかりきこえ給、

「紅葉賀」巻、帝が藤壺のために行つた行幸の試案において、藤壺は光源氏の美しい舞い姿に目を奪われる。そして、もし大それた気持ちが存在しなかったとしたらまして素晴らしいと思えただろうに――胎内に光源氏の子を宿しながらあるまじき感情を抱くのである。藤壺の感想を聞きたい帝は、そのまま夜の御殿に彼女を召す右のくだりは当然ながら(旧訳)では削除されている。注目したいのは傍線部、現在は「成けり」で句点を打つ一文である。光源氏的美しさを認めざるを得ない情動と、理知や良識が呼び起す苦悩と罪の意識――この短文には、かき乱されている藤壺の心中を言外に匂わせる効果がある。「御局は桐壺なり。」という一文然り、この物語はしばしば、作中人物の心のありようを活写した後、抗い得ない厳然とした事実、逃れがたい状況を突きつける際に短文を用いる。岡崎の言う「極めて長いセンテンスがあるかと思ふと、又極めて短いセンテンスが、其中に点出されてゐて、鋭く気持ちを引緊めてゆく」(第二回)文章とは、まさにこのような箇所を指しているであろう。次に、一文が長大な箇所にも注目してみたい。

年ごろはたゞものゝきこえなどのつゝましさに、すこしなさけあるけしきみせば、それにつけて人のとがめ出ることこそそののみ、ひとへにおほししのびつゝ、哀をもおほう御らんじすぐし、すくくしうもてなし給しを、かばかりにうき世のひとつとなれと、かけても此かたにはいひ出ることなくて、やみぬるばかりの、人の御をもむけも、あながちなりし心のひくかたにまかせず、かつはめやすくもてかくしつるぞかしと、哀に恋しうもいかゞおほし出ざらん、御かへりもすこしこまやかにて、

「須磨」巻、藤壺が、密通の秘事が漏れることなく時が過ぎたことに安堵し、蟄居する光源氏に言葉を尽くして返信をしようとする場面である。文章は引用部分以降も続き、藤壺の返信の内容へと移つてゆく。傍線部はこれまで光源氏に対して抱いてきた警戒心と、それゆえに冷淡な態度を取らざるを得なかったことを振り返る藤壺の心中の叙述であり、「と」で受ける『湖月抄』はここで地の文へと切り替わる。

ただし、大島本をはじめとした所謂青表紙本系にはこの「と」がなく、作中人物の心中と地の文との区別が付かない解釈の難解な箇所である。ここで注目したいのは、渡辺実氏の指摘である。³³⁾

こういつた文章の分析は極めて困難なことに属するが、まず「かばかりに憂き世の人言なれども」という逆説をうける文章の処理法が、他の文章におけるそれと全く異なる所がないことは認められるであろう。もし他の文章ならば、この逆説は、

かばかりに憂き世の人言なれども、かけても、このかたには言ひ出づることなくして止みにしよ。

とでもして一旦文を切るであろう。(中略) 言わば源氏物語では、分断して書いた方が整頓された文章となり得る所を、自然さを犠牲にしてまで一つのことに関係づけて組み入れてしまう、強引な文章法が見られるのである。

氏は、右の一文の異例の長大さに『源氏物語』の獨創性を見ている。傍線部「分断して書いた方が整頓された文章となり得る所を、自然さを犠牲にしてまで一つのことに関係づけて組み入れ」ることに加え、時に「主語なしの変則術語を配してゆく」場合があると、これこそが『源氏物語』の文章の特質と結論付けたのであった。実は、早々にこの点に気づき自身の創作に援用していたのが、他ならぬ谷崎である。『春琴抄』の成功を経た昭和九年(一九三四)六月に発表した『春琴抄後語』には、次のような言及がある。

誰も知る通り源氏の帚木の巻に於ける雨夜の品定めは、会話と地の文との区別がやゝこしく、何処から誰の言葉になるのだから分りにくいのであるが、しかしあゝ云ふ風にした方が日本文の美しさが出る。私はそこに興味を持ち、専ら地の文と会話とのつながり工合に苦心を払った。それでも「卍」では読者の便宜を考へて、カギだけは施して置いたのであるが、「蘆刈」ではそれも除ることにした。

右では「帚木」巻前半部、光源氏や頭中将らが女性について論議する雨夜の品定めが例示され「会話と地の文との区別がやゝこしく、何処から誰の言葉になるのだから分りにくい」こと、その点にこそ「日本文の美しさが出る」ことが説かれている。谷崎は、一高時代以来『湖月抄』に親しみ³⁴⁾そうした体験をふまえて『卍』、『蘆刈』を執筆した。昭和初期の作品からは『湖月抄』の影響を感じ取っても良いであろう。『文章読本』においても、谷崎は文章に重要な要素の一つ、「調子」の筆頭として「流麗」を挙げ、次のように説明している。

これは、前に申しました源氏物語派の文章がそれでありまして、すらくと、

水の流れるやうな、何処にも凝滞するところのない調子であります。此の調子の文章を書く人は、一語々々の印象が際立つことを嫌みます。さうして、一つの単語から次の単語へ移るのに、そのつながり工合を眼立たないやうに、なだらかにする。同様に、一つのセンテンスから次のセンテンスへ移るのにも、境界をぼかすやうにして、何処で前のセンテンスが終り、何処で後のが始まるのか、けじめを分らなくするのであります。

後文ではセンテンスの切れ目を明確にする「簡潔」が正反対の「調子」として位置づけられている。してみれば、岡崎が第二回で述べた「出来るだけ文章をずらすと曳摺つて行かう」としているという理解は厳密には正確ではない。谷崎は「境界をぼか」し「けじめを分らなくする」、つまり文章の切れ目を不明瞭にし、発話者をあいまいにしようとしているのである。近年も主体が不明瞭な物語の文体の特徴はしばしば論じられている。何処から誰の言葉になるのだから「はつきりしない(流麗体)」は、視点が移り変わってゆく原文の自在な語りの再現なのであった。

敗戦から四年後の昭和二十四年(一九四九)一〇月、谷崎は「中央公論」に、光源氏が藤壺の寝所に忍び込む場面の抄訳、「藤壺―賢木」の巻補遺」を発表する。末尾には、「(以下拙著源氏賢木の巻一九頁「大后が怪しからぬことのやうに仰つしやつていらつしやる中宮の御位を」につづく)」とあり、「旧訳」に挿入して読ませるための工夫が凝らされた。藤壺の名を冠する作品名が象徴するように、言うなればこれは「骨無し源氏」に「脊髄」を戻す儀式であった。既に水面下で「新訳」の計画は動き出している頃だが、文体は「流麗体」である。

〈原文〉

けたかうはづかしげなるさまなども、さらにこと人と思わきがたきを、なをかぎりなく、昔より思ひしめ聞えてし心の思ひなしにや、さまことにいみじうねびまさり給にけるかなと、たぐひなくおぼえ給に、心まどひして、やをらみ帳のうちに、あさましうむくつけうおぼされて、やがてひれふし給へり、

〈藤壺〉

ほんに、品威がおありになつて、近寄り難いやうな趣のあるところなど、さう云つても姫君そのまゝで、とても別人とは思へないくらゐなのであるが、でも昔から限りなくお心を寄せていらつした思ひなしであらうか、今ではやはり此の宮の方がずうつとお美しう完成されていらつしやることよと、世にたぐひなくお感じになるまゝに、ついふらふらとお迷ひになつて、やをら御帳台の内を伝うてお這入りになつて、おん衣の袂をお捉へになると、けはひもしるくさつ

と薫物の香が匂ったので、宮はあさましくも恐ろしくお思ひなされて、そのまゝうつ俯しておしまひになった。

右は光源氏、藤壺双方の心中の描写が交錯する箇所であり、原文も長大な一文によって構成されている。光源氏の熱視を通して活写される藤壺のたぐいまれなる品格や生気溢れる美しさ、魅了される光源氏の心中、熱病に浮かされたように藤壺に接近してゆく光源氏のふるまい、捕えられた衣の裾の微動と上気する光源氏の体温、芳香によって事態を悟る藤壺、あたかも語り手が息継ぎの間も惜しんで語るかのような叙述である。後年「藤壺―賢木」の巻補遺^②を再読した玉上は次のような絶賛を寄せている。

――さて、「賢木の巻補遺」を読むと、改めて谷崎さんの旧訳のよさを思う。原文の流麗さを伝えるためには簡結さを伝えるのは犠牲にしたと言っていられるが、原文は長文が続くが時に単文を放りこんで引きしめるのだけれども、この場面は、たまたまそういう単文は出て来ない所だからでもあるけれども、原文の流麗を伝えるほかに谷崎独特のねばりが生じて、この場面の効果をあげている。

傍線部は暗に岡崎の「谷崎源氏論（前掲・第二回）の言葉を受けてのものである。玉上は〈流麗体〉の良さを確認すると同時に、「谷崎独特のねばり」を感じたようで、末尾では〈新訳〉のために尽力したことを振り返りつつも「全体としては、わたしは「旧訳」のほうが好きである」とまで述べたのであった。

実は〈流麗体〉の「ねばり」という特性をいち早く指摘したのも、他ならぬ岡崎である^③。

谷崎氏の訳し方は詩的なものを喪失してはゐるが、あのねばりのある文章は、原作の散文的要素を出してゐる所があり、原作がやはり小説としての意義において本質の認められるべきものであるとするならば、谷崎氏の散文的な厭力や持続力は賞讃されてよいかも知れない。

一五年稿の加筆部分では、右のように〈旧訳〉の長所にも言及した上で、〈流麗体〉を「少し油っこい所」のある、現代人の口に合う「西洋料理的方法」に例えている。「谷崎源氏論」とは、『刺青』以来の谷崎作品の読者でもあった岡崎が、時局に左右されることなく〈旧訳〉の長短をきわめて精緻に捉えた評論であったと言えよう。

おわりに

「骨無し源氏」という批判は、谷崎に言わせればあまりに酷なものであったに違

いない。旧稿で指摘したことであるが、第一回配本の巻々（「桐壺」―「若紫」）については、訳文を繰り返し読むことによって藤壺の物語を読み取らせる仕掛けが施されているからである^④。岡崎が待ったという第二回配本の時期、内閣では秘かに谷崎源氏の発禁が議論されてもいた^⑤。訳出が進むにつれて、削除の基準はどんどん厳格になり、最終的に校閲者山田が驚くほどの分量になっていったのだと推定される。「源氏物語」のような長大な作品の訳は、刊行が開始してしまつたら完結まで時間を要する。また、訳出が開始された以上、文体を中途で変更することも許されない。「源氏物語」訳という仕事は作家にとって大きなかけとなる所以である^⑥。さて、「流麗」という言葉は昭和六年（一九三一）に書かれた『卍』緒言にも見える^⑦。

作者は元来東京の生れなれども、居を摂州岡本の里に定めてより茲に歳有り、関西婦人の紅唇より出づる上方言葉の甘美と流麗とに魅せらるること久しく、試みに会話も地の文も大阪弁を以て一貫したる物語を成さんと欲し、乃ち方言の顧問として大阪府立女子専門学校出身の助手二名を雇ひ、一年有余を費してこれを完結す。

「関西婦人の紅唇より出づる上方言葉の甘美と流麗」に魅了された体験、そこから会話文にも地の文にも大阪弁を用いそのつながり具合に工夫をした「物語」を作りあげるに至った。〈旧訳〉に取り組んだ数年間は、谷崎が経済的にとみに困窮していた時期にあたることもあり、『源氏物語』訳とは糊口をしのぐための仕事に過ぎないという見方も根強い^⑧。しかしながら、〈旧訳〉の仕事をやリ遂げた根底には、「流麗」という美質への並々ならぬ憧憬と愛着とがあったはずである。

敗戦を経て、改訳の筆を執ることになる昭和二十六年（一九五二）頃、日本社会は再び大きく変容しつつあった。国粹主義が撤回されると同時に皇室に対する観念も一変し、皇室敬語の平明化も図られた頃である。谷崎源氏にも、敬語によって接続した〈流麗体〉ではない、戦後という「時局」に相応しい文体が要請された。訳者谷崎の試みは〈新訳〉へと続いてゆくこととなる。

※谷崎源氏以外の谷崎作品の引用は全て『谷崎潤一郎全集』全二六巻（中央公論新社）に依る。また、旧字は新字に改めた。

【付記】本稿はJSPS科研費20K00327ならびに二〇二一年度同志社女子大学奨励研究助成金による研究成果の一部である。

注

- (1) 雨宮庸蔵「谷崎潤一郎―壁面風のデッサン―」(『偲ぶ草 ジャーナリスト六十年』中央公論社 昭和六三年(一九八八) 一九頁)。
- (2) 『池田彌三郎著作集』(第七巻 折口信夫研究 角川書店 昭和五四年(一九七九)四四八〜四四九頁)。山田と折口との間にかねてより軋轢があったことは西村亨氏「折口信夫の山田孝雄観」(『新考 源氏物語の成立』武蔵野書院 平成二八年(二〇一六) 三五八頁)からも知られる。
- (3) 玉上琢彌「『谷崎源氏』をめぐる思い出(上)」(『大谷女子大國文』第一六号 昭和六一年(一九八六)三月)。
- (4) 『塔』昭和二四年(一九四九)五月号掲載「春宵対談」では、谷崎が和辻哲郎、後藤末雄を相手に削除は山田ではなく自分が主導したと語っている。この点については別稿を用意している。
- (5) 「谷崎源氏を読みみて」(初出・『文芸』第七巻第三号 改造社 昭和一四年(一九三九)三月。引用は舟橋聖一『多感』矢貴書店 昭和一八年(一九四三)一九七頁)。ただし、舟橋は密通の筋書きが主軸となる「若紫」巻以降は未見であり、刊行開始直後に大阪軍人会館で開かれた「潤一郎訳 源氏物語」刊行記念講演会では講演者を務めた谷崎の「第二の弟子」を自称した人物でもある(小谷野敦「谷崎潤一郎伝 堂々たる人生」中公文庫 令和三年(二〇二一)三〇六頁)。(旧訳)擁護の立場からの発言であることは加味する必要がある。
- (6) 全集第二四巻 三二三頁。
- (7) 玉上も(『流麗体』の特徴として「句読も原文から自由である」点を挙げる(『谷崎源氏』をめぐる思い出(中)「大谷女子大國文」第一七号 昭和六一年(一九八六)一二月)。
- (8) 谷崎は昭和一三年(一九三八)一―月稿の序文において「次に此の書を読まれる方々にお断りしておきたいのは、これは源氏物語の文学的翻訳であつて、講義ではない、と云ふことである」と述べている。
- (9) 谷崎は日本人には「十の実力があるものなら七か八しかないやうに自分も思ひ、人にも見せかける」国民性があり、その気質が国語にも影響していると記している(全集第一八巻 四五頁)。
- (10) 谷崎は「簡結」と「簡潔」、どちらの表記も用いている。いずれも原典に従う。
- (11) 草稿の詳細については、拙稿「二つの谷崎源氏―國學院大學蔵『潤一郎新訳 源氏物語』草稿より見る一考察―」(『文学・語学』第一九六号、平成二三年(二〇一一)二月)を参照されたい。
- (12) 拙稿「文体を一新する―戦後の国文学者たちと谷崎源氏の交渉―」(『国語国文』八九一七号、令和二年(二〇二〇)七月)。
- (13) 『源氏物語』原文は谷崎が訳出に使用したと推定される『湖月抄』(文獻書院、大正一五年版)に依る。この点についても別稿を用意している。
- (14) 注(11) 拙稿。
- (15) 滝沢博夫「光源氏名のみことぐしう」(俳句雑誌「木語」四月号(未見)、注(7) 玉上論文より転載)。
- (16) 拙稿「山田孝雄と『源氏物語』―國學院大學蔵『潤一郎新訳源氏物語』草稿における注釈態度から」(『國學院大學大学院紀要―文学研究科』第四一輯 平成二一年三月)。
- (17) なお、「タイプ原稿の上欄」とあるが、この箇所は山田のタイプ原稿には書き入れがない。「画像③」の旧訳本への書き入れの記憶違いであろう。
- (18) 中村ともえ「谷崎潤一郎と翻訳―『潤一郎訳源氏物語』まで」(『谷崎潤一郎論 近代小説の条件』青簡社 平成三二年(二〇一九) 二二六頁)。
- (19) 注(3)と同じ。
- (20) (旧訳)の初期の編集担当者雨宮庸蔵は「当時これについて東北大学の岡崎義恵教授は「あれでは骨抜きで価値がない」と激しい非難をした。時代の状況を知らずにそういったとすれば品性を疑われても仕方がない。当然のことながら谷崎も山田も、この非難に堪えてこれを無視し黙殺した。賢明であつた」と記している(注(1)と同じ)。
- (21) 著作集五『源氏物語の美』(宝文館 昭和三五年(一九六〇) 四五―頁)。
- (22) 平林一「国文学者の抵抗―歴史社会学派―」(同志社大学人文科学研究所研究叢書『戦時下抵抗の研究Ⅱ キリスト者・自由主義者の場合』みすず書房 昭和五三年(一九七八) 三九三頁)。また、直近では中丸貴史氏のご論文「軍靴の響く場から『文学』を叫ぶ」(『日本史研究』第七〇〇号 令和二年(二〇二〇)一二月)において論じている。
- (23) 吉田精一「『文芸学』」(『日本文学概説』有精堂出版 昭和五〇年(一九七五) 七五頁)。
- (24) 注(22)と同じ。
- (25) 注(22)と同じ。
- (26) 岡崎は古典研究を国威発揚に活用することによって研究の自由が奪われる危

- 機感にも言及している。近年との社会動向との重なりを感じざるを得ない。
- (27) 岡崎は第四回の冒頭で「何とも言ひやうのない悲しみ」を感じたと記していた。
- (28) 『岡崎義恵先生年譜』(回想岡崎義恵先生) 仙台共同印刷 昭和五八年(一九八三) 六月 一四一頁。
- (29) 駒込武・川村肇・奈須恵子編『戦時下学問の統制と動員 日本諸学振興委員会の研究』(東京大学出版会 平成二三年(二〇一一)の「附表七 各学会発表者・発表題目一覧」に依る。なお、拙稿「国文学者と時局―谷崎源氏の改訳から見る、戦中戦後の天皇表象と最高敬語―」(総合文化研究所紀要) 第三八巻 令和三年(二〇二二)七月)も参照されたい。
- (30) ただし、「三四年稿」には(新訳)の文体について「改訂されても、原文の匂いを留め得ないことは、遺憾ながら前と大差がない」という評価が追記されている。
- (31) 池田亀鑑編著『源氏物語大成』(中央公論社 昭和五九年(一九八四) 二―四一七頁)。なお、肖柏本のみ「と」が入る本文を持っており(加藤洋介・校異集成(稿)『源氏物語校異集成(稿)』<http://www2.kansai-u.ac.jp/ok/matsu/index.html> アクセス日時2021/09/29)、『湖月抄』本文を「肖柏本系で、青表紙本としては不純」(『世界大百科事典』平凡社)と評する今井源衛氏の指摘が想起される。
- (32) 「以下、「もて隠しつるぞかし」まで、直接話法で藤壺の心内を叙述。源氏への敬語を省いたのは、この体験が自他の区別を超えるほど深刻なものであったことをもの語ろう」(新編日本古典文学全集頭注 小学館)。
- (33) 「文章法から見た源氏物語―須磨・明石の巻の表現に即して―」(『文学』第五〇号 岩波書店 昭和五七年(一九八二) 一一月)。
- (34) 全集第一七巻 二二一頁。
- (35) 「にくまれ口」に「何度か通読しようとしては中途で放棄し、ようよう兎も角も読み終えることが出来たのは一高時代であったと記憶する」とある(全集第二四巻 四九五頁)。
- (36) 陣野英則氏は、作中世界を見聞した女房、その語りを書き記す人の言葉、その書かれたものを読む人、書写する人という伝播の諸相を「話声」という言葉で論じている(『源氏物語の話しと表現世界』勉誠出版)。稿者は陣野論を主肯する立場から、第三者があたかも直接見聞したかのようにもつともらしく語る行為を「再話」と定義し、この物語が作中人物の生きた世界と語り手の現在との間に何人もの「再話者」を潜在させていると論じたことがある(透視される女たちの再話―物語の淵源としての言語空間―「中古文学」第九六号 平成二七年(二〇一五) 一二月、『源氏物語』の和歌と再話の構造―藤壺の心中詠を起点として―「中古文学」第一〇四号 令和元年(二〇一九) 一一月)。
- (37) 注(7)と同じ。
- (38) 再び池田「私製・折口信夫年譜」(注(2)『同書』四七〇頁)に戻ると、折口は昭和二四年(一九四九)一月、『細雪』の頃の谷崎の文体について言及している。志賀の文章には「杉の垣根の刈りこんだ」ような「整頓感」があるのに対し、谷崎のそれには「乱雑」さがある。それゆえに文章も筋も「いくら書いても書き直」すことが可能であり、「いつまでも伸びていく」ことが可能なのだという。同時代の古典文学研究者が谷崎の文章をどうとらえていたかを示す貴重な証言である。
- (39) 「谷崎潤一郎の「蘆刈」―その芸術的基調について―」(初出は昭和二八年(一九五三)八月、のち著作集九『近代日本の小説』(宝文館 昭和三四年(一九五九) 四八〇頁)。
- (40) 拙稿「源氏物語」を「現代」に「移植」する―(旧訳)から(新訳)へ―谷崎源氏転換のプロセス―(『文学・語学』第二〇四号 平成二四年(二〇一二) 一一月)。
- (41) 昭和一四年(一九三九)二月、平沼騏一郎内閣で(旧訳)の発禁が議論されている(『小川平吉関係文書 一』(小川平吉文書研究会編 みすず書房 昭和四八年(一九七三))。注(4)、(13)と合わせてこの件は稿を改めたい。
- (42) 山田は昭和一三年一月五日稿「谷崎氏と源氏物語―校閲者のことば―」において(旧訳)の原稿を受け取った段階で国体の思想にふれそうな箇所は既に取り除かれていた、しかも谷崎が原文を削った箇所は山田が考える以上にずっと多かったと証言している(『中央公論』昭和一四年一月号)。
- (43) 「『新訳源氏物語』は、文体を一変した。(中略)これは谷崎さんの賭けであった、と思う。そしてそれが見事に成功したのである」(注(3) 玉上論文)。
- (44) 全集第一三巻 二四九頁。
- (45) (新訳)「柏木」巻以降谷崎の傍らで口述筆記を行った伊吹和子氏は、谷崎から『源氏物語』原典に対する「畏敬や敬虔さ」「愛着」を感取することは出来なかつたと記している(『二谷崎源氏』とよばれるもの) 国文学「解釈と鑑賞」別冊「源氏物語の鑑賞と基礎知識 花散里」至文堂 平成一五年)。
- (46) 注(12) 拙稿を参照されたい。